

中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究 ーダイクシスと照応を統合した観点からー

単 娜（お茶の水女子大学大学院）

1. はじめに

日本語指示詞「コ・ソ・ア」は中国人学習者の初級段階から導入されているにも関わらず、上級においても誤用が目立っている。言語類型論的に見る場合、日本語の指示体系が 3 項対立を成しているのに対し、中国語の指示体系は 2 項対立を成している。そういった違いによって、中国人学習者が日本語指示詞を習得する際に困難な点があると考えられるが、それは具体的にどのような点なのか、また、なぜ困難なのかはまだ一部しか明らかにされていない。本研究において、指示詞「コ・ソ・ア」における中国人学習者の習得実態を調べ、より体系的な特徴を見出したうえで、その習得における問題点を明らかにしたい。

2. 先行研究

吉田(1980)が 479 の言語の指示詞を分類した結果、世界中に最も広く認められる類型は 2 分型(例えば中国語、英語など)であり、次に多い類型は 3 分型(例えば日本語、韓国語など)であることが判明された。森田(1982)は、中国語のような言語を母語とするものにとっては、日本語の 3 項の指示方式は理解しにくいと指摘している。しかし、日本語指示詞が中国人学習者にとって本当に難しいかはまだ明らかにされていない。

斉藤・久慈等(1985)は、子どもの指示詞の発達について縦断的に研究を行った成果に基づき、指示領域という概念を取り入れた分析の枠組を提示した。また、第一言語としての日本語指示詞の発達の道筋を提示した。

迫田(1998)は、学習者の中間言語に焦点を当て、学習者の指示詞の使用には母語の違いに関わらず共通の出現順序と共通の学習困難点があることを明らかにした。さらに、迫田他(2001)では、第二言語としての日本語指示詞(非現場指示)の習得における学習者の一般的な使用の出現順序が次のように提示されていた。

コ系文脈 \geq ソ系文脈 $>$ ア系文脈 $>$ ア系観念 (迫田・他, 2001:207)

しかし、この指示詞の出現順序は、現場指示を除外したものである。学習者の指示詞の習得順序を全般的に把握するためには、全ての指示用法が含まれた研究が必要であろう。

また、迫田(1998)では、学習者の指示詞ソとアの使い分け傾向が日本人母語話者の使い分け傾向と異なっていることが明らかされた。しかし、指示詞コ・ソ・アを全体的に見る場合、学習者の使い分け傾向が日本人母語話者の使い分け傾向と異なっているのかはまだ明らかにされていない。

従って、現場指示及び非現場指示の全ての指示詞を取り入れた分析の枠組みを用い、第一言語としての発達研究及び第二言語としての習得研究の結果に照らし合わせ、学習者の日本語指示詞の習得状況を調べる必要があると思われる。

3. 内容

3.1. 研究課題

1. 日本人母語話者及び日本語習熟度を異にする中国人学習者は、指示詞「コ・ソ・ア」の使い分けにおいて異なる傾向を示すか。
2. 中国人学習者にとって、指示詞「コ・ソ・ア」の用法は、どの指示領域が易しく、どの指示領域が難しいか。

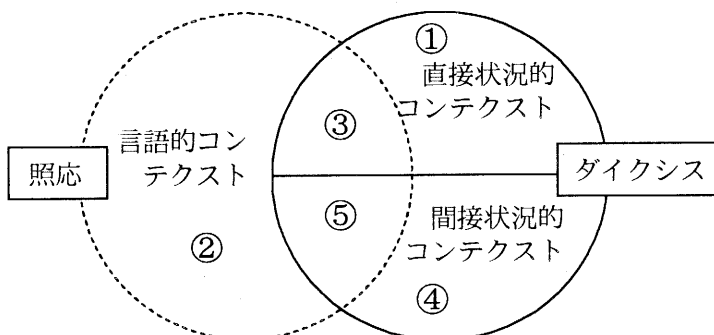
3.2. 被験者及び調査方法

中国の大学で日本語を専攻している中国人学習者 104 名を対象に、コ・ソ・アの中から適切なものを選択する多肢選択(37 問)を行った。調査質問文は川口他(1991)等から得たものである。日本人母語話者の間に揺れがないものを選ぶため、63 名の日本人母語話者にも調査を行った。また、学習者の使い分けに日本語習熟度による差があるかを見るために、「日本語能力簡易試験 SPOT¹⁾」(Version B, 60 問)を用いて学習者の日本語能力を調べ、SPOT 得点の中央値 50 によって、学習者のデータを「上位群」(48 名)と「下位群」(56 名)に分けた。

3.3. 分析の枠組み

学習者の指示詞をより全般的に見るために、本研究は、斉藤・久慈等(1985)を元に、ダイクシスと照応を統合した分析の枠組を新たに提示した森塚(2002)を用い、分析することにする。森塚(2002)の分析の枠組は、以下の図 1 に示されている。各指示領域

の定義及び例文(本研究で行われた調査質問文)は表 1 に示す。



【図 1】ダイクシスと照応を統合した分析のための枠組(森塚)

【表 1】各指示領域の定義・例文及び使用可能な指示詞

指示領域	定義	調査時質問文例	使用可能な指示詞
①	現場指示用法に当たり、話し手が指示する指示対象は物理的に存在し、現在知覚可能なもの。	(A、BはAの服を選んでいる) A：(試着している服を指して)ねえ、これはどう？私に似合う？ B：「うーん、それ悪くないけど、こっちのほうがいいんじゃないかな。」	コ・ソ・ア
②	話し手が指示する指示対象は、直接言語化されて(先行詞となつて)いるか、意味特性の強い言語的文脈から間接的に推論されるもの。	A：「日本のお見合いはレストランでご飯を食べながらするのよ。」 B：「中国にもそれはありますよ。」	ソ
③	指示対象が物理的に存在し、知覚可能であると同時に、直接あるいは間接的に言及され、言語的文脈の一部に含まれているもの。	(車に乗ってドライブをしているときに、Aが空を飛ぶものを指しながら) A：「おい、あれは何だろう。」 B：「あれはただの飛行船だよ。」	コ・ソ ²
④	指示対象が、話し手の記憶、イメージのみに存在するもの(指示によって聴者との共有が可能か否かはそれまでの記憶、イメージの共有度に依存する)。	(Aが友人に話している) A：「今朝、駅前で事故があったんだ。 <u>あの</u> 様子じゃ運転手も怪我したんじゃないかな。」	ア
⑤	指示対象が、話し手の記憶、イメージに存在すると同時に、直接あるいは間接的に言及され、言語的文脈の一部に含まれているもの。	A：「先生が学生だったときには、どのように勉強されたのですか。」 B：「 <u>あの</u> 頃は本がなくて、本当に苦労しました。」	コ・ソ・ア

4. 分析結果及び考察

4.1. 研究課題 1

中国人学習者の全般的な使い分け傾向を見るために、調査質問文ごとに、「コ」「ソ」

「ア」がそれぞれ占めた割合を求めた。その結果は表 2 に示す。

【表 2】中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の選択割合

質問文 ^a	指示領域①				指示領域②							
	2-1	3-1	15-1	30-1	5	6	7	12	16-1	17	21	25
コ	95	88	1	9	18	18	14	8	17	11	5	7
ソ	1	10	10	10	62	74	53	63	40	80	38	26
ア	4	2	89	82	20	8	33	29	42	10	57	67
質問文	指示領域③				指示領域④			指示領域⑤				
	13	2-2	15-2	30-2	9	18-1	19	28	8	23		
コ	77	5	2	8	3	14	42	48	0	13		
ソ	18	88	29	38	42	18	32	46	29	50		
ア	5	8	69	55	55	67	26	6	71	37		

太字は正答となるもの。「項目」欄以外の数字の単位は%である。

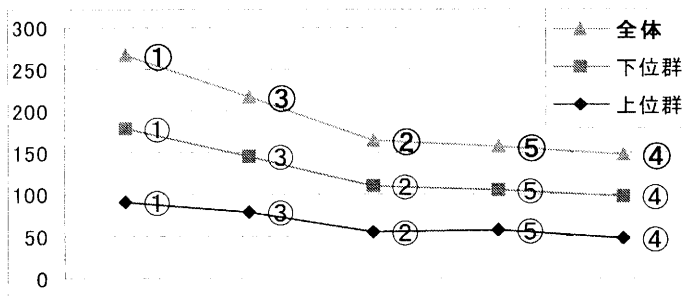
全体的に、コ系の使い分けはある程度安定しているが、ソ系とア系の使い分けに揺れがあるようである。学習者の使い分け傾向に日本語能力による差があるかを調べるために、上位群と下位群に分けて、一項目ずつ、指示詞の選択数に 2×3 の χ^2 検定を行ったが、指示領域②の質問文項目 17 ($\chi^2(2) = 10.71, p < .05$) を除き、有意な偏りが見られなかった。次に、指示詞の使い分け傾向における中国人学習者と日本人母語話者の比較を試みた。日本人母語話者群と学習者群(全体、上位群、下位群を別々に)とに分けて、指示詞選択数に χ^2 検定を行ったところ、指示領域①においては両者の間に有意な偏りが見られず、指示領域②③④⑤においては、すべての項目に有意な偏りが見られるという共通した結果となった。つまり、指示領域①においては中国人学習者と日本人母語話者との間にほぼ同じ使い分け傾向が見られたが、その他の指示領域においては両者の使い分け傾向は異なっている。

以上のことから、中国人学習者の使い分け傾向と日本人母語話者の使い分け傾向との間には共通する部分もあるということが確認された。指示領域①のコンテキストは「直接状況的」であり、指示対象も物理的に存在している。このような具体的かつ直接的に知覚可能な条件の場合、認知にかかる負担が少なく、認知しやすくなる。そのため、ほかの指示領域より習得されやすく、結果としては日本人母語話者の指示詞の使い分けと同様の傾向になったと考えられる。また、日本語能力に関わらず、指示領域①以外の指示領域においては、中国人学習者の日本語指示詞の使い分けが日本人母語話者と異なった傾向になっていることから、日本語指示詞の習得は中国人学習者にと

って難しいことがうかがわれる。

4.2. 研究課題 2

中国人学習者の回答を得点化し、各指示領域の平均得点を求めた。平均得点を高い順から示すと図 2 になる。各指示領域の得点について、被験者内要因の一元配置分散分析を行った結果、1%水準で指示領域の主効果は有意であった ($F(4,515)=45.28, p<.01$)。



【図 2】 指示領域別得点

さらに、Tukey の HSD

法による多重比較を行ったところ、次のような結果が得られた。

指示領域① > 指示領域③ > 指示領域② ≥ 指示領域⑤ ≥ 指示領域④

久慈・斉藤(1985)の研究によって明らかにされた第一言語の発達過程における指示詞の発達順序⁵⁾に照らし合わせると、表 3 のようにまとめられる。

【表 3】 第一言語の発達順序との比較(指示領域の場合)

日本人母語話者の子どもの指示能力の発達順序	①→③→②
	①→⑤→④
中国人学習者の指示領域における難易度順序	①>③>②≥⑤≥④

この表から、この難易度順序が第一言語の指示詞の発達順序に関係していることが示唆された。指示領域の概念を導入し、迫田(2001)によって明らかにされた習得順序を整理すると、非現場指示の習得順序は次のようになる。

⑤に近いコ系 → ②に近いソ系 → ⑤に近いア系 → ④に近いア系

コ系文脈指示以外は、本研究で明らかになった難易度順序の順番と一致している。この難易度順序が第二言語の指示詞の習得順序に関係していることが示唆された。

ここで、本研究で明らかにされた難易度順序は、中国人学習者の指示詞コ・ソ・アの全体的な習得順序として考えられる、という仮説が立てられる。

5. まとめ及び今後の課題

本研究は、日本語指示詞の使い分けが中国人学習者にとって難しいこと、その使い

分け傾向に日本人母語話者と共通する部分があることを確認した。また、中国人学習者の習得順序の仮説の構築を試みた。今後、この習得順序の仮説を検証するために長期的な観察が必要であり、このような順序に至った原因を追求する必要もある。また、学習環境の違いによって指示詞の習得にいかなる影響があるかを解明する必要もあり、今後、日本に滞在している中国人学習者を対象とした調査も必要であろう。これらは全て今後の課題としたい。

注

- ¹ 日本語能力簡易試験(Simple Performance-Oriented Test)とは、「音声テープを聞きながら解答用紙に書かれた同じ文を読み、文中に一箇所ある()に聞こえた音(ひらがな 1 字分)を書き込ませる形式のテストで、日本語学習者の日本語能力を簡単かつ短時間で測定するものである」(フォード丹羽順子・小林典子・山本啓史,1995)。
- ² 森塚(2002)では、指示領域③には「コ」と「ソ」しか現れないことになる。しかし、例えば例 3 の B の発言では、指示領域③に「ア」が現れることが可能であることが分かる。従って、本研究では「ア」を加えて検討を行う。
- ³ 紙幅の関係で、質問文の詳細は単の修士論文(2003 未公刊)をご参照いただきたい。
- ⁴ 「>」は統計的に有意に大きいことを意味する。「≥」は数値が大きいことを意味する。
- ⁵ 久慈・斉藤(1985)では、「ア→オ→エ」と「ア→ウ→イ」との二通りの道筋が確認されたが、それを本研究の分析の枠組に直すと「①→③→②」と「①→⑤→④」と導かれる。

参考文献

- 川口義一・小宮千鶴子・守谷三千代・新屋映子・熊井浩子(1991)『日本語を教える 2 日本語教育チェックブックポイントをおさえる教え方』p.140-171 バベル・プレス
- 久慈洋子・斉藤こずゑ(1985)「デイスコース知識-指示能力-」『会話能力の発達段階』昭和 57, 58, 59 年度科学研究費補助金特定研究(1)「言語の標準化」研究成果報告書会話能力研究グループ代表者無藤隆 p.15-39
- 迫田久美子(1998)『中間言語研究:日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社
- 森塚千絵(2002)「日本語指示詞の習得に関する事例研究-自然習得から教室学習へ移行したロシア語母語話者を対象に-」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』平成 12~13 年度科学研究費補助金萌芽的研究研究成果報告書(課題番号 1287043)代表者長友和彦 p.115-129
- 森田良行(1982)「指示詞の扱い方」『講座日本語教育』第 18 分冊 p.22-37 早稲田大学語学教育研究所
- 野田尚志・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子(2001)『日本語学習者の文法習得』大修館書店
- フォード丹羽順子・小林典子・山本啓史(1995)「日本語能力簡易試験(SPOT)は何を測定しているか-音声テープ要因の解析-」『日本語教育』86 p.93-102 日本語教育学会
- 吉田集而(1980)「指示詞に見られる空間分割類型とその普遍性」『国立民族学博物館研究報告』5-4 p.833-950 国立民族学博物館